

## 留学・研究計画書

氏名 藤本 透子	留学機関名 カザフスタン共和国教育・科学省管轄東洋学研究所
留学先国名 カザフスタン共和国	留学期間 西暦 2003年4月～2005年3月
研究テーマ（留学目 的）	
独立後のカザフスタンにおける子どもの社会化と文化継承	
研究テーマ（留学目的）の説明	
<p>本研究は、カザフスタンの一村落において、子どもが文化を継承していく社会化の過程を検証することにより、独立後のカザフ文化の動態を明らかにすることを目的とする。ソ連の崩壊とカザフスタン独立によってひきおこされた社会変動により、カザフの子どもたちの成長過程は、カザフ文化の安定的な継承ではなく、以前のソビエト化の影響、独立後のイスラーム復興と、グローバル化にともなう西側文化の流入の影響を受けた、きわめて複雑な過程である。</p> <p>これまでの文化人類学研究は、変化が緩やかな社会を対象とし、子どもがその社会に固有の文化を習得する「社会化」の過程を、安定的な文化継承のメカニズムとして研究してきた。しかし、変化の少ない社会を想定してきた従来の社会化理論では、グローバル化と固有の文化のあいだで激しく揺れ動く現代社会の文化動態を理解し、将来の動向を予測することは不可能であり、新たな理論の構築が求められる。本研究では、とりわけ急激な変化にさらされている旧ソ連ムスリム地域のカザフスタンを対象に、変動する社会における子どもの社会化を分析する方法論を提示し、子どもの社会化の複雑な過程からカザフ文化の継承について考察する。</p> <p>カザフの子どもは、一方では国立教育機関、他方ではさまざまな社会的ネットワークに参加することにより社会化される。この過程を検討するため、本研究では、第一に、幼稚園や学校など国立教育機関における子どもの社会化と文化継承を分析する。国立教育機関は、旧ソ連時代にはソビエト国民の形成を目指し、カザフ文化は限られた範囲でしか言及されなかった。独立後には、カザフの歴史や文学の習得に力がいれられるようになったが、カザフ文化の継承というよりも、多民族国家であるカザフスタンの国民形成が目的とされる。第二に、本研究でとくに着目したいのが、カザフが父系出自親族を基盤とする広範な社会的ネットワークの中で社会生活を営み、国立教育機関とは異なるかたちで子どもの社会化を行なっていることである。子どもは大人とともに牧畜などの労働をおこない、儀礼に参加することによって、社会的な存在として成長する。独立後には、旧ソ連時代には行なわれることの少なかったカザフの通過儀礼や祖先祭祀が再び行なわれる傾向にあり、カザフ文化の継承に人々の関心が向き始めている。また、イスラームが復興したことは、再建されたモスクを中心として新たな社会的ネットワークが形成される可能性をはらみ、子どもの社会化過程に影響を及ぼす。さらに、西側文化の流入は、子どもの教育や将来的な職業の選択肢を増やした。こうした社会状況の変化をふまえ、本研究では第三に、個人個人のライフヒストリーから世代間による子どもの社会化の差異について分析し、旧ソ連時代から独立後にかけて文化の継承がどのようなプロセスとして行なわれてきたのか、その動態を考察する。子どもの社会化の複雑な過程を研究することは、旧ソ連地域、なかでもムスリム地域である中央アジアにおける文化動態という現代的課題に答える上で、きわめて重要である。</p>	

## 成果報告書

助成番号

02 -003

氏名 藤本 透子

留学先国名  
カザフスタン共和国機関名 カザフスタン共和国教育・科学省  
管轄東洋学研究所

研究テーマ：独立後のカザフスタンにおける子どもの社会化と文化継承

留学期間：2003年4月1日～2005年3月31日

## 1. 問題意識

研究の目的は、カザフスタンの一村落において、子どもが文化を継承していく社会化の過程を検証することにより、独立後のカザフ文化の動態を明らかにすることにあつた。ソ連崩壊とカザフスタン独立によってひきおこされた社会変動により、カザフの子どもの成長過程は、カザフ文化の安定的な継承ではなく、以前のソビエト化の影響、独立後のイスラーム復興とグローバル化に伴う西側文化の流入の影響を受けた、きわめて複雑な過程であろうということが、筆者の推測であつた。

実際に留学し研究を進めていくなかで、より具体的に、社会的ネットワーク、系譜認識、宗教実践が、とくに現在のカザフ文化の動態に深く関わっていることが明らかになった。さらに、これらの点が互いにかかわりあう点として、近年、祖先儀礼が重要になってきていることが観察された。この報告書では、こうした全体的な状況を踏まえた上で、村の歴史のなかの子ども、学校教育、社会的ネットワークのなかの子どもの成長を示すものとしての系譜の伝承や儀礼、遊びなどの点に着目して、調査結果を報告する。

## 2. 研究方法と収集資料

## 1) 文献調査

カザフスタンの東洋学研究所を中心として、ロシア語、カザフ語文献の収集と読解を行った。子どもについて書かれたカザフ語、ロシア語の研究はそれほど多くないが、民族学的研究のなかに子どもに関する記述を見ることができる。また、近年ではカザフの子どもの伝統的な社会化を取り上げた研究も現れている。

これらの研究は、主に2つの傾向に分けることができる。第一に、ソ連民族学の影響を受け、唯物主義にもとづいて社会の発展を描いた研究である(e.g. Arghynbaev, Toleubaev)。第二に、ソ連やイスラームの影響を取り除いてカザフの子どもの社会化を明らかにしようとする、カザフスタン独立前後からの研究である(e.g. Kul'saliev)。両者ともカザフの子どもの関する貴重な研究であり、重要なデータを提供している。ただし、いずれもイデオロギー上の制約から逃れられていない。

実際に、カザフスタン独立後約10年を経て、カザフの子どもがどのように暮らしているのかは、フィールド調査から明らかにする必要がある。東洋学研究所から派遣される形で、カザフスタン北部の農村でフィールド調査を行なった。調査に当たっては、調査地域に関するロシア語およびカザフ語の文献を参照した。パブロダル州事典、調査地近辺の郷土史家の本などである。これらの文献から、調査地を含むカザフスタン北部は、カザフスタンの中でもロシアの影響を早くから受けてきた地域であり、イスラームは比較的遅く伝播した地域であると指摘することができる。また、調査地はスラブ系人口の多いカザフスタン北部において、カザフ人口が圧倒的に多いという特色を持つと指摘できる。

## 2) フィールド調査

カザフスタン北部のパブロダル州バヤナウル地区A村T集落で、2003年6月末より2005年3月末まで断続的に1年6ヶ月、文化人類学的な調査を行った。A村は広いカザフ草原の中にあつて、T集落の人口は約750人、約140世帯である。村人の99パーセントはカザフ人である。村人の主な生業は牧畜である。A村のほか、同地区内のほか3村でも短期間の調査を行った。

参与観察とインタビューを主な調査方法とした。1年目は村の生活を理解する意味で参与観察を主とし、2年目は調査を深めるために約20人のインフォーマントからくり返しインタビューをとつた。参与観察の際には、ビデオやカメラも利用した。インタビューはMDを利用した場合と、筆記で行なった場合とがある。調査期間中は日誌をつけ、インタビューや参与観察はフィールドノートにデータを整理した。

フィールド調査で収集した資料は、フィールドノート5冊、日誌15冊(計約1800ページ)、写真フィルム45本(約1620枚)、MD9本(約250時間)、ビデオ29本(約290時間)である。これらの大部分は未整理であり、今後、データ整理を行い、論文として発表していく。

### 3. 研究にともなった問題

#### 1) 外国人登録

調査にともなって困難だった点としては、まず外国人登録が挙げられる。東洋学研究所のあるアルマトゥ市で外国人登録をしたが、長期滞在したのはアルマトゥ市ではなく調査地のあるパブロダル州であった。このため、パブロダル市で登録延長する際に、アルマトゥ市の登録を抹消したという書類を要求されるなど、手続きに非常に時間がかかった。

また、調査地に入るにあたっては、州、地区、村の役場と警察の双方に連絡した。調査期間中、バヤナウル地区にいた外国人は私ともうひとりのアメリカ人英語教師のみで、私の存在は非常に目立ったようである。アルマトゥ市への移動時には村や地区の役場、警察に連絡を取るよういわれ、そのようにしていた。

#### 2) 通信手段

このほか、最も困ったのは通信手段である。調査地に郵便局はなく、隣の集落まで行かなければならない。また、約 140 世帯の集落で電話は約 10 世帯にのみある。地区長に直訴した結果、調査開始から半年後に、どうにか滞在先に電話を設置してもらうことができた。電話は強風や落雷などによってしばしば不調、ときに不通になった。しかし、この電話を通じてなんとかインターネットにも接続でき、アルマトゥ市にある東洋学研究所や日本とも連絡を取ることができた。

#### 3) 気候と食生活

調査地は、冬は非常に寒くなるところで、防寒対策にも苦勞した。特に 2004 年から 2005 年にかけての冬は -30 度前後の日が続いた。奨学金で皮のあたたかいコート、ブーツ、毛布、暖炉にくべる石炭などを購入してしのぐことができた。また、冬場は野菜が非常に不足するため、野菜を塩蔵する、ビタミン剤を飲むなどして栄養不足をできるかぎり防いだ。

#### 4) 人間関係

調査地での人間関係は、おおむね良かったといえる。ただ、村人が利用した電話の代金の不払いをめぐって、一部の人たちと関係が良くなかったことはある。また、お祝いの写真やビデオを撮ってほしいという要求が多く、自分の調査にも必要なときや時間が取れるときには応じたが、断るのに苦勞することもあった。

### 4. 調査結果

調査結果はまだ十分に分析されていない状態である。ここでは、得られた結果を簡単に報告する。

#### 1) 村の歴史のなかの子ども

A 村の歴史を、村人の記憶や郷土史家の研究により簡単に振り返ると、以下の通りである。19 世紀にはカザフ・ハン国はロシア帝国の間接統治下に入っており、A 村周辺にはカザフ人遊牧民の冬営地がいくつか存在していた。A 村周辺をロシア帝国の指名によって統治していたのはカザフ人有力者ショルマノフ一族であった。現在の位置に A 村が成立するのは、ロシア革命によってソ連が成立し、牧畜の集団化が行われてからである。1929 年にコルホーズ成立。1931~1932 年に集団化政策の失敗による飢餓。コルホーズは統廃合を繰り返しながら発展。1954 年から処女地開拓。1957 年に近辺のコルホーズとともにソフホーズに統合された。1996 年、ソフホーズ解散。

学校教育の変遷についてみると、19 世紀末、現在の地区中心バヤナウル村にはメドレセが設立され、カザフ人有力者の子弟のなかにはイスラーム教育を受けるものもあった。1903 年には、土地のカザフ人有力者の尽力により、現在の A 村の近くに「カザフ・ロシア学校」が設立された。これはイスラーム教育ではなくロシア語や数学、地理などを教える新式の学校であった。カザフ人有力者の子どもが通った。

ソ連が成立すると、1929 年にカザフ・ロシア学校は富裕者が開いた学校として場所を移され、閉鎖に追い込まれた。1933 年、ソビエト式学校として現在の T 集落の北側に再校された。4 年制の学校であり、有力者の子弟だけでなくすべての子どもが義務教育を受けた（のち、7 年制の学校に移行）。1961 年、現在の A 村の中心に新しい校舎が立てられ、8 年制学校に移行。

T 集落の学校はカザフ語で教育を行っていたが隣の集落にはロシア語学校が設けられた。現在 40~50 代の村人の中には、ロシア語が必要になると考えた両親によって、ロシア語学校に通った村人も少数ながらいた。また、ロシア語の授業も当然のことながらあり、ロシア語の習得に力が入れられていた。

学校では、社会主義の理念を体現するものとして、ピオネール活動が活発であった。ピオネールは小さい子どもたちに勉強を教えたり、歌や踊りを教えたりした。また、バレーボールなどのスポーツをし、地区のピオネール体育大会に参加した。処女地開拓時代には、新しく作られた隣の集落へトラクターで行き、ジャガイモ

を植える労働奉仕もした。ソ連の崩壊とともに、ピオネール活動はなくなった。なお、この学校出身の学者でカザフスタン科学アカデミー会員であった人の生誕 90 周年が 1989 年に祝われた。1999 年には生誕 100 周年が祝われている。また、2004 年には、開校 100 年祭が 1 年遅れで祝われた。

子どもの暮らしについてみると、第 2 次世界大戦中に子ども時代を送った人々は、十分に学校に通えず、子どもの頃から仕事をした。1940 年代後半以降の戦後育ちの人々は、学校に通いつつ、処女地開拓の労働力としてソフホーズの労働奉仕に参加した。戦中、戦後すぐに育った人々は、父親などの戦死や生活の苦しさのため、親族の家に引き取られるなど複雑な環境で育った人が多い。1970 年代以降の子どもは、労働奉仕などをするよりも、学校のピオネール活動に参加してコンサートを開く、スポーツに参加するなどしている。

次に、現在における子どもの暮らしについて検討する。

## 2) 教育制度と学校教育

子どもが育つ環境として、まず国の教育制度に触れる。カザフスタンでは幼稚園で就学前教育が行われるが、A 村には幼稚園はない。学校は 7 歳入額であるが、6 歳で 0 学年に入学し就学前教育を受けるシステムになっている。学校は小・中・高一貫の 11 年制で、このうち 9 学年までが義務教育である。11 学年を終えると、試験を経て大学に進学することができる。

次に授業についてみる。まず、授業はカザフ語で行われている。ソ連時代との違いとして、英語の授業が行われるようになったこと、ロシア語には以前ほど力が入れられていないことが挙げられる。また、生徒のロシア語に対する熱意も以前にくらべてない。しかし、カザフスタン北部はロシア人をはじめロシア語話者人口の多いところであり、学校卒業後に街の大学へ行った子どもが「村にいたときはロシア語が必要だと思わなかったが、街に行きなを話すにもロシア語が必要だと感じた」と語る例も観察された。また、近年、T 集落の学校出身でカザフ人学者 S (1960 年代没) についての授業が行われている。このことは、最近、歴史の見直しと関連して、郷土出身のカザフ人の再評価が行われていることによる。

学校行事を検討すると、始業式、終了式、入学式、卒業式のほか、以下の祝日が祝われている。共和国記念日、独立記念日、独ソ戦戦勝記念日、国際婦人デー、カザフスタン国軍創設記念日、新年、ナウルズ (春分の日祭)。このうち、戦勝記念日、国際婦人デー、新年はソ連時代からの祝日であるが、共和国記念日、独立記念日は、カザフスタン独立後の祝日である。また、ナウルズはソ連時代末期の 1990 年頃から、カザフの伝統的祭として祝われるようになった。さらに、2003 年には初めての試みとしてイスラーム犠牲祭にちなんだ集会在学校で開かれた。これは政府からの通達ではなく学校が独自の試みで、イスラームを子どもに伝えるため「イスラームと教育」というテーマで行ったものであった。

以上の状況を踏まえた上で、世帯や社会的ネットワークのなかにおける子どもの成長過程について、調査結果を報告する。

## 3) 世帯構成と親族関係

カザフの子どもが育つプライベートな環境として、まず T 集落の世帯構成に着目すると、夫方同居が主である。規範的には、末息子が結婚後も両親の家にとどまって暮らす。現在では末息子に限らず、村に留まる息子が両親と暮らす傾向が見られる。妻の両親との同居は、非常に希である。

カザフの出自は父系をたどって認識され、父系クラン「ルウ」が親族関係の認識に重要である。カザフの親族カテゴリーには、オズ・ジュルト (父方親族)、ナガシ・ジュルト (母方親族)、カイウン・ジュルト (姻戚=エゴの配偶者の親族) がある。このジュルトという親族カテゴリーにはルウの区別が関わっており、それぞれ父のルウの人々とその配偶者、母のルウの人びととその配偶者、配偶者のルウの人々とその配偶者たち、と説明できる。これらに準ずる親族カテゴリーとして、クダラル (子どもの配偶者の両親、その親族)、ジェンデル (父系親族女性の子どもやその子孫) をあげることができる。このなかで、子どもに特に関わるのは、次に見るように、オズ・ジュルトつまり父方親族と、ナガシ・ジュルトつまり母方親族である。

## 4) 子育て

幼児の世話は、生後 40 日まで、父方祖母が面倒を見るという規範がある。また、初孫は祖父母の子になる慣習がある。子どもは祖父母を父母と呼んで育つ。ここで初孫を子とする祖父母は、ふつうは父方祖父母である。例えば、生後 1 年で孫を引きとると父方祖父母が宣言し、実際に引き取って育てる事例が観察された。子の母親が仕事に出るため、自分から積極的に、子どもを夫の両親に預ける場合もある。子の父方祖父母がまだ若く街で仕事をしているような場合、村に暮らす母方祖父母に子どもが預けられることもある。ただしこのような場合でも、出自ははっきりと区別されている。例えば、孫を預かった母方祖母が「子どもを預かっている数年のあいだ、子どもを病気にならないように気をつけ、向こうに無事返さなければ」と語っていることが観察された。母方祖父母にとって、娘の子どもはジェン (外孫) であって、娘の夫側の子だと認識されている。

実際に子どもが父方、母方のどちらの祖父母や親族によりよくなつくかは、さまざまである。必ずしも出自の意識に支えられた父方とは限らない。母方の祖父母のほうが優しいとか、孫が少ないのでかわいがってもらえるなどの理由で、母方親族のところへ行きたがる子どもも見られる。

#### 5) 系譜の伝承

子育てにもみられるように、カザフ人にとって出自は重要な概念である。カザフ人は父系の系譜を重んじる。系譜の認識にはルウ、シェジレ、ジェティアタ、姓という4つの形がある。ルウは特定の祖先を選んで出自を示す形式、シェジレは祖先を系譜の形で網羅する形式、ジェティアタは直系7世代の父系の祖先を述べる形式であり、姓は祖先の名前を埋め込む形式である。このうちとくにルウとジェティアタは小さな頃から子どもに教えられる。とくに男の子の場合、「ルウは?」「ジェティアタ?」とくり返し尋ねて、暗記していえるよう教育する。

ルウは、生まれてから死ぬまで変わらない。女性は結婚してもルウはそのままである。このため、子どもにとって父親のルウと母親のルウは違う。子どものルウは父のルウと同じである。どのルウの出身かということは、村人のあいだで明確に区別されており、両親のみでなく、さまざまな親族が子どもにルウを尋ねて、子どもがどう答えるかを楽しんでいる。子どものほうも、母方親族に尋ねられたときは母方のルウを答えて親しみを表すなど、自分の出自を操作して答えることがある。このようなやり取りの中で、子どもは自分の出自を覚えていくと考えられる。

#### 6) 子どもの成長にともなう儀礼

日常的な子育てとは別に、子どもの成長の節目には親族らが集まって儀礼や祝をする。

まず、出生祝は、村人によると、もともと産後の女性と赤ん坊を悪霊から守るため夜通しそばにいて歌を歌い楽器を弾き鳴らしたものだだったという。現在では、産院から退院した日に親族や友人を呼んで祝う。

命名儀礼は、赤ん坊の両耳に名前を呼ぶ儀礼で、ムッラーが行う。イスラーム的な儀礼である。ただし、村人のあいだにあまり定着しているとは言えず、行われることは少ない。

揺りかごの儀礼は、初めてカザフの揺りかごに赤ん坊を寝かせるときに、火をつけたネズの枝で揺りかごを清める儀礼である。揺りかごはソ連時代には「赤ん坊の成長を妨げる」として使用が廃れたが、近年、再評価されて使われている。

生後40日の儀礼は、銀貨を入れた水をスプーンで40杯すくって注ぎ、赤ん坊を洗う。銀は清潔さを象徴し、このように洗うことで赤ん坊の肌が強くなるといわれている。洗い終わったあと、赤ん坊の髪と爪を生後初めて切る。生後40日の儀礼は、赤ん坊の成長の節目として非常に重要視されている。

ひとり歩きの儀礼は、赤ん坊がよちよち歩きをするようになったとき、白黒の紐で赤ん坊の足を八の字に縛り、はさみで切ってから歩かせる。こうすると赤ん坊が転ばなくなるといわれている。紐を切った人に赤ん坊は似るといわれ、足の早い人に切ってもらう。白黒の紐は、この世のよいことも悪いこともこえていくということの意味である、また「白黒の紐を越えない」に「ウソをつかない」という意味があることから、清い人に育つようにという意味があると解釈されている。

男の子の場合は、5歳~7歳くらいで割礼をする。学校に7歳で入学する前に、割礼を済ませるのが普通である。割礼は、男のこの成長の節目であると同時に、ムスリムになる儀礼だともみなされている。かつてはホジャ（預言者の子孫とされる人々）やムッラーが行ったが、現在では外科医が行っている。割礼は、赤ん坊の頃に行なわれるほかの儀礼と異なって、「割礼して初めて一人前」という本人の自覚を伴う点も特徴的である。

なお、ソ連時代に定着した習慣として、学校に入学すると祝が行われる。割礼祝と一緒に行なわれることも多い。同じくソ連時代に行なわれるようになった習慣として、大学卒業祝や兵役からの帰還を祝うこともある。

これらの儀礼や祝のうち、出生祝、揺りかごの儀礼、生後40日の儀礼、ひとり歩きの儀礼はとくに女性が中心となる。命名儀礼と割礼・割礼祝には、男女ともに参加するが、儀礼を行うのは男性である。儀礼や祝に集まるのは、親族や友人たちである。集まった人々、特に年長者が赤ん坊の成長を祈ることが重要視される。

これらの儀礼や祝をすることは、子どもの無事な成長を願うと同時に、大人が子どもをカザフ人として社会に受け入れていくことでもあると考えられる。このうち、とくにイスラームに関わるのは命名儀礼と割礼である。ただし、村人がイスラームと関わる儀礼とそうでない儀礼をはっきり区別しているわけではない。

#### 7) イスラームと子ども

成長儀礼以外にも、子どもは小さいころから家で信仰にふれて育つ。とくに食後に年長者が「食卓には幸を、体には健康を与えたまえ」など神に祈り、手で顔を拭くしぐさをする習慣は、村人のあいだに深く根付いている。この祈りの言葉を聴いて覚え、大人がするのを真似る子どもも観察された。村人によると、ソ連時代には無神論が教えられ、この祈りをしないようにとの指導がされた。しかし、食後の祈りは重要であり、祖父母によって子どもにも教えられていたという。

礼拝や断食は、とくに年長者が行う傾向がある。しかし、近年では一部の子どもや若者もするようになった。このことには、中東から入ってきているイスラームの影響が強い。T 集落のある世帯では、街でトルコ人が出資しているイスラーム系の寄宿舎に子どもを送り出して勉強させている。アルマトゥ市の、エジプトが出資するイスラーム大学でイスラームを学ぶ村出身の若者もいる。学校での犠牲祭集会は、村に帰省していたその若者にイスラームについて学ぼうという試みでもあった。

中東からのイスラームに子どもや若者が惹かれることに対し、村人の反応はさまざまである。お酒を飲んで遊んでばかりいるよりいいとみなす人がいる一方、とくに娘がスカーフを深くかぶって非社会的になるのはよくないとみなす村人も多い。葬儀や祖先儀礼の行い方などを巡っても、村の年長者の伝統的イスラームと、若者たちの学ぶ新しいイスラームのあいだには軋轢が生じている。しかし、イスラームを学ぶ子どもたちの祖父母世代が、ソ連時代にもイスラームを信じて礼拝を行っていた人々であったことは興味深い。

## 9) 生業と子ども

T 集落の生業は、基本的な牧畜である。ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギなどの家畜を飼っている。また小さな菜園で、自家消費用のジャガイモその他の野菜を栽培している家も多い。ソ連時代には T 集落にも図書館、電話局などがあり、トラクター運転手や獣医としてもソフホーズで働くことができた。ソフホーズ解散後これらの職場で働いていた人たちは失業し、相対的に家での牧畜や菜園の生計に占める比率が高まっている。

牧畜は基本的に性別分業がなされており、子どもが手伝う仕事も性の区分にしたがっている。たとえば、男の子は家畜小屋掃除、羊毛刈り、放牧、家畜に干草を与えるなど。女の子は家の片付け、掃除、縫い物、編み物、料理、パン作り、乳搾り、乳製品や肉製品の加工などである。手伝い始める年齢と仕事の種類はやや個人差がある。筆者が観察した事例では、例えば 7 歳の男の子が家畜への干草やり、家畜小屋への追い込みを担当し、17 歳の男の子が放牧、羊毛刈り、家畜小屋掃除を担当していた。女の子の場合は、5, 6 歳から家の片付けと掃除をし、14~15 歳では料理、搾乳などもこなすようになる。

## 8) 遊び

以上で報告してきた、系譜の伝承、儀礼、イスラーム的なしつけ、生業の手伝いなどは、大人から子どもへの働きかけが強いといえる。これに対して遊びは、子どもが主体的に行っているものとして、社会化や成長の過程を見るうえで興味深い。観察事例にいまのところばらつきがあるが、得られた結果を報告する。

まず、5~9 歳の男の子の遊びとしては以下が観察された。

- ・石炭遊び。秋から冬にかけて村には石炭をトラックで売りに来る。冬に、男の子たちが雪を石炭に見たててリヤカーで運んで遊ぶ。
- ・家畜小屋遊び。ヒツジやウシ、ウマのひぎの骨を家畜に見立てて遊ぶ。本で家畜小屋の囲いを作り、兵士の人形を人に見立て、骨を家畜に見立てる。家畜に井戸から水をやる、家畜を放牧に出す、家畜を家畜小屋に入れるなどして遊ぶ。数人で遊ぶときは近所の人たちとの行き来もする。オモチャの車を使うこともある。
- ・馬乗り遊び。1 人が四つ這いになってウマになり、もう 1 人がウマに乗って遊ぶ。チューチューと、ウマを駆けさせるときの掛け声を出す。また、ドゥルルルと声をかけてウマを止める。また、ヒツジをウマに見立てて乗る、猫をウマに見立てて乗る。
- ・お祝い遊び。ピンをグラス、泥を料理に見立てて、お祝いの席で願い事を言って乾杯する大人たちを真似る。
- ・スケート遊び。冬に村近くの小川や学校近くのスケートリンクで、スケート遊びをする。板を使って、ホッケーの真似もしていた。
- ・テレビゲーム。ロシア製や日本製、中国製のテレビゲームのソフトが売られている。子どもがねだるおもちゃの 1 つ。遊びだすと何時間でも遊んでいる。しかしソフト数が少ないため数日たつとあきるのか、遊ぶのをやめる。また何日かしてから遊び始める。
- ・テレビ。キャンディキャンディが放送されていた。アラジンと魔法のランプ。ロシアのアニメがよく放送される。西部劇。ブラジル製やロシア製、韓国製のメロドラマを子どもも見ている。香港映画。アニメのビデオ。シンドバット、トムとジェリーなど、ディズニーのアニメのビデオカセットが売られており、子どもが熱心に見ている。ピストルごっこ。ピストルは男の子がねだるおもちゃのひとつ。テレビの西部劇? を真似して、遊ぶ。ロシア語で「手を上げろ」「殺すぞ」といいながら遊んでいる。
- ・車ごっこ。車は小さい男の子がよくねだるおもちゃ。車を動かして遊ぶ。

3~5 歳の女の子の場合は、以下の通り。

- ・赤ちゃん（人形）遊び。人形を子どもに見立てて、食事をさせたり寝かしつけたりして遊ぶ。人形がなければ、ピンを頭にして、布を着せて赤ん坊に見立てて遊ぶ。
- ・テレビ。
  - ・踊り。
- ・服を着替える。

・料理の真似。小麦粉の生地を作っているとき、女の子がくれるようねだり、麵棒で延ばす真似をするなど。  
以上から、生業をまねた遊びや大人を真似た遊びが多いこと、それとともに、テレビの影響があることがうかがわれる。とくに大人の活動を真似た遊びでは、男女によってすることに違いがある。

以上の調査結果は、まだデータ整理の段階にある。  
これまでの研究に基づいて出した成果は以下の通りである。

## 5. 研究結果の発表

### 1) 学会発表

カザフスタンで、以下の2つの学会に参加。

2004年5月27～28日にパブロダル市で開かれた「マルグラン生誕100周年記念学術会議」で、「カザフの誕生と成長の儀礼—カザフスタン南部ソザク地区とカザフスタン北部バヤナウル地区の事例から—」というタイトルで、ロシア語で発表した。

2004年10月6～9日に、カザフスタン南部のトルキスタン市で、ヤサヴィ名称トルコ・カザフ大学が主催した国際学術会議「現在のチュルク学—理論、実践、展望—」に参加した。「カザフの親族関係の特徴—日本との比較において—」というタイトルで、カザフ語で発表した。

帰国後、本研究の成果の一部として、2005年5月21～22日に北海道大学で行われる第39回日本文化人類学会研究大会で「クルアーン朗読の現代的意味—カザフスタン北部農村における祖先とのつながりの表現」という題目で個人発表をする予定である。

### 2) 投稿論文など

論文「あるインテリ女性の子育て—ソ連時代からカザフスタン独立後の変動のなかで—」を執筆した。この論文は、1999年～2002年にアルマトゥ市で行なった参与観察と聞き取りにもとづいているが、今回の留学期間中に補足調査を行った。日本沙漠学会『沙漠研究』2005年3月号掲載。

平凡社から2005年4月刊行の『中央ユーラシアを知る事典』の「ゆりかご」「遊牧地域における伝統的家族」「現在の家族—事例1カザフスタン」「カザフスタンの誕生祝と成長儀礼」「親族名称」「現代版ナウルズの祝い方—事例2カザフスタン」の稿を担当し、カザフスタンで資料を収集して執筆した。

「カザフスタン—草原の村でのフィールドワーク」、日本中央アジア学会ニューズレター、2005年3月発行。現地報告として、調査地の選定と資料、外国人登録にともなう手続き、調査地で困難だった電話の設置について執筆した。

なお、2005年3月に東洋学研究所へ報告書を提出（ビデオ、写真資料含む）。報告書はカザフ語で作成した。

## 6. 留学を終えて

2年間の留学期間中、ときおりアルマトゥ市の留学先に行ったほかは、ほとんどカザフスタン北部の村で調査をしていた。草原の中の村に暮らすことは、不便なことも多かったが、発見があって楽しかった。

はじめは村の全体を把握することに努め、次に子どもの社会化について詳しく見ていく予定であった。しかし、調査を進めるうちに、子どもよりも祖先儀礼が村全体の社会的ネットワークや宗教実践を見るうえで興味深いと感じたため、子どもも観察しつつ、祖先儀礼を軸として調査を進めることになった。この報告書では、当初のテーマに沿って、子どもの社会化と文化継承にかかわるデータのみを報告している。

調査のデータは未整理なものが多く、これから分析と考察を進めていかなければならない。今後、半年間のあいだに大まかなデータ分析を終え、秋に2ヶ月間程度の補足調査をする予定である。その後、博士論文を執筆していく。

この2年間の留学は、これから研究を進めていく上で、自分の大切な基礎になると考える。とりわけ、これまでカザフスタン農村部に長期滞在した外国人は少なく、報告が限られていた。カザフスタン北部の村に1年半にわたって暮らしたことは、感覚としてカザフの生活を理解する上で貴重な体験であった。

このような機会を与えてくださった松下国際財団に、心から感謝申し上げます。